

阿川弘之

●自由主義者の憤慨録

何が悪
国を思
うて

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸甚に存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

国を思うて何が悪い 一自由主義者の憤慨録

昭和62年5月31日 初版1刷発行

定価790円

昭和62年6月25日 3刷発行

著者 阿 川 弘 之

発行者 大 坪 昌 夫

印刷者 萩 原 歳 子

東京都文京区後楽2-21-12

萩原印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替 東京6-115347

株式会社 光文社
電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Hiroyuki Agawa 1987

ISBN4-334-05138-3

Printed in Japan

KAPPA HOMES



国を思うて何が悪い

—自由主義者の憤慨録

あ がわ ひろ ゆき
阿川弘之

光文社
カッパ・ホームス

『国を思ふて何が悪い』

目次

戦時下のリベラリスト 9

文化人は自由主義がお嫌い？ 14

国旗に対する国際儀礼 18

文化大革命を讃美した人たち 22

文士に多い安普請 27

礼儀知らずの新聞記者ども 31

天皇制の論じ方 35

植民地経営に見る陸海軍かたぎ 38

日の丸の由来 46

君が代の由来 50

時流に乗る人乗らぬ人 52

気骨のあつた文士たち 58

大新聞の正義面 66

急進派の事大主義 72

誹りてこれにならう 78

理想の国はどこの国 83

共産主義と日本の国体 86

世の中に絶えて陸式なかりせば 91

三島由紀夫の思い出 97

人焉ンゾ廬サンヤ 105

芸術院賞の授賞式 110

首相官邸園遊会 116

中国か支那か 121

何も彼も日本が悪かった？ 128

泣く泣くもいい方を取る形見わけ 135

非武装中立というお伽話 138

本音でものを言え 144

宰相の顔 147

亡命のすすめ 153

陛下の一と言 160

国危うして名君出づ 164

泣き出した高峰三枝子 169

結びに 172

カバー装訂

宇野
亜喜良

戦時下のリベラリスト

国を思うとか、国を愛するとかいう言葉を口にすると、すぐあれは右翼だと言われる傾向がわが国にはあるようですね。まして、陛下に対する尊崇信愛の念など表明すれば、いわゆる進歩的文化人たちから、許し難い時代錯誤の反動と見られるらしい。戦時中、自由主義者がすぐアカだと言われたでしょ。何かレッテルを貼って相手をきめつける、そのきめつけ方がそれとこれと、よく似ているように私には思えてならないんです。

私なぞ、どちらかと言えば戦前の自由主義教育をうけて育った人間ですが、自由主義といえ、先年こんなことがありました。戦争の最中、予備学生の教育にたずさわった野地宗助さんのじそうすけという海軍中佐がいます。つまり私たちの、昔の教官なんですが、

この野地中佐が予備学生教育の思い出を十年程前、本にして出されました。丸善の地下で小さな出版記念会が開かれ、野地さんがスピーチに立って、

「予備学生として入隊して来た当時、諸君の中には自由主義的な思想を持っておる方もおられたようだが……」

と言われるので、私はあとで少し楯ついたんです。

「教官、大変失礼ですけど、只今のは、自由主義的な思想を持っていない方もおられたようだがのお間違いじゃないですか」

実際、大東亜戦争の始まる前はむろんのこと、戦争になってからも、あのころ大学生の大方はリベラルな考え方をしてましたよ。もう少し前のマルクスボーイたちは又別でしょうけど、右にせよ左にせよ教条主義的コチコチの学生は少なかったと思います。海軍を志願したのも、あの節、大学出ればすぐ軍隊にとられるに決まってるんだから、どうせとられるなら、陸軍よりは、まだしも自由な気風の残っているらしい海軍がいいやと言うんでみんな予備学生の採用試験を受けたんです。

野地宗助さんは海軍兵学校の第五十一期生です。五十一期というのは終戦内閣の首

相鈴木貫太郎さんが海兵の校長だった大正中期に江田島へ入った人たちで、校長の影響も時代思潮の影響もあったんでしよう、非常に自由な、柔軟な考え方をしているインテリ軍人が多いんです。当時鈴木さんに「足ルヲ知ルヲ以テ富メリトナス」という言葉を教えられ、六十年後の今、信州の自分の山小屋を「知足庵」と名づけて清廉な晩年を送っている方も知ってます。程度高いんですよ、概して。その中で野地さんは、鈴木さんの話をろくに聞いてなかったのか、後年右翼にでもかぶれてしまったのか、五十一年期とも思えぬことを仰有るから、私はちよっと食ってかかったんですがね。

もともとよき時代の海軍は、英国流のフレキシブルなりベラルなもの考え方をするのが主流というか、当たり前だったんだけど、非常時とかアメリカ許すまじとか言っていきり立ってるうちに、次第にそういう空気が薄れて来るんですね。私たちの分隊監事に浦野三郎大尉という人がいて、

「お前たちのこれまで受けて来た教育は、個人の個性とか、才能を大切にするという西洋流の自由主義教育であって、そういう教育は今の日本の国情に合わないのだから、その残滓をきれいに洗い流してしまえ」

と説教されたことがあります。その時も、これが海軍かとガツカリだったし、誰もそんなもの洗い流したりしませんでしたがね。その教官から、

「お前たちも少尉に任官すると、海軍士官としての俸給が出る。この俸給とは、海軍士官にとってどういうものか」

と質問を受けたことがありました。旧制の水戸高校から東大へ来て、予備学生隊で私の班にいた大場和夫というのが立ち上がって、

「海軍士官としての体面を保ちながら御奉公するための必要経費として戴くのであります」

と答えたら、教官は、よろしい、と満足そうだったけど、私たち、あとで、

「おい、大場、貴様調子のいいこと言いやがって」

と、みなでからかうんです。そういう学生気分というか、自由な雰囲気は、なかなか抜けませんでしたね。

浦野教官は巡洋艦那珂の砲術長として、昭和十九年二月、トラック島空襲の時戦死されました。その時の那珂艦長が末沢慶政という人で、この人は戦争末期、軍務局二

課で、終戦工作とも関連する枢要な働きをします。末沢さんのこと、私は作品の中にも書いたことがあります。ある時、会っているいろいろ昔話を聞いているうちに、浦野三郎砲術長の話が出て、あの方は私たちの教官だったんですが、どんな印象なり思い出をお持ちですか、と聞いたら、まあ普通の士官でしたな、と言って、あまり重きを置いてない様子でした。つまり、末沢さんあたりの眼から見ると、時代が下がってコチコチの画一主義的な考え方を持つようになった若い士官は、どうももう一つ気に入らんということだったんでしょね。

だけど、野地教官にしても、浦野教官にしても、当時の日本の社会一般や陸軍の内務班なんぞに比べればずっとマシだったんじゃないですか。われわれ、ものの考え方が自由主義的だからといって、それでひどい目にあわされるなんてことは全くありませんでしたから。その点、警察は学生を目の仇にしていたようで、私なんかもうやな思い出があります。朝鮮を旅行中、特高に訊問されたことがあってね。長い旅なので、二等車に乗ってたんですが、いきなり入って来て、学生のくせになぜ二等に乗ったのかというから、あんた誰ですか、自分の金で何等に乗ろうと自由でしょといったよう

な口答えをしたら、持っていた鞆の底から、読みかけの文庫本の中まで徹底的に調べられました。いやな時代でしたよ。ただ、右がよくないからその反対の左はいいんだというようなイリュージョンで、簡単な裏返しの図式でものを判断すると間違いが起ころんじやないでしょうか。

文化人は自由主義がお嫌い？

私たちが大学へ入る少し前、東大経済学部の河合榮治郎教授が、まるでアカのように言われて大学から追放されましたが、あの人は左偏向なんかしてない合理主義者の自由主義者ですよ。海軍の二年現役主計科士官の中にも河合教授を尊敬している人がずいぶんいました。それから河合さんのほかに、有名な歴史学者の津田だ左右そうき博士がやはりアカだとか不敬だとかいうあれで追放されましたよね。

戦後、岩波書店「世界」編集長の吉野源三郎さんが、津田左右吉博士に皇室のこと書いてもらえば、きびしい天皇制批判をするだろうと考えたらしくて、原稿を依頼したんです。そしたら津田博士は、戦前戦中の不愉快な体験にもかかわらず、極めてさめた公正な眼を持^じしておられて、ちゃんと皇室の存在意義を認め、天皇さんに充分敬意を払った論文を書いて来たんですね。それでああいう革新を標榜している雑誌としては大変困^つたらしい。編集長の、長い言い訳がましい附記をそえて津田論文を掲載しましてね。吉野さんは私の若書きの短篇を認めて採ってくれた恩人なんだけど、右と同じく、左がかりで眼がくらむとこんなことになるものかと、滑稽なような淋しいような気がしたのを覚えてます。

戦後、ジャーナリズムで声を大きくして活躍したインテリたち、今も活躍しているそういうインテリは、進歩的というのか左翼的というのか、どうも自由主義が嫌いなんじゃないか。日本で知識人文化人と呼ばれるためには、親共でなくてもいいけど反共でなくちゃならぬという説があるそうですね。昭和十年代は今と逆でして、親右翼でなくとも、反反右翼反反陸軍でないといけなかった。西園寺公望^{さいおんじきんもち}が、日本人とい